

# 苫小牧支部

## 1. 支部のあゆみ

北海道学校体育研究連盟の支部として有志が集い活動を始めたのは、昭和37・8年ころである。

その後、苫小牧において全道研究大会開催の機運が高まり、道連盟事務局にいろいろとご指導をいただき（湊先生・当時本通小教頭）昭和40年4月に当初会員53名で苫小牧市学校体育研究会が創立され、昭和43年には、第7回北海道学校体育研究連盟研究大会が開催された。

以来、木村誠先生、栗城先生、金井先生、佐藤先生、永田先生等のご指導を賜りながら9回の支部研究大会を開催している。

昭和50年に苫小牧市教育研究会が発足し、保健体育研究部会として組織の再編成がなされ今年まで35回の研究大会を開催してきた。

その間、胆振学校体育研究連盟との連携を図り、相互の研究会に参加したり、北海道学校体育研究大会や北海道学校体育研究連盟研究担当者会議に毎年代表を派遣し研究交流を深めるなかで苫小牧市における学校体育の充実発展をめざし指導力向上のための研修に努めてきた。

昭和55年には第17回、平成5年には第30回の北海道学校体育研究大会を当市で開催し、これまでの研究を確かめ今後の研究活動に示唆をいただき大きな成果を上げている。

今年度の苫小牧市教育研究会保健体育研究部会は小学校21名、中学校14名、計35名の部会員で構成され、研究テーマにせまる研修活動を展開するとともに、支部会員の組織強化に努めているところである。

## 2. 研究内容

当市における研究推進体制は、現在授業研究班、調査研究班の2班で構成され、ここ数年は「一人一人が自らの力を知り、ともに高め合う児童生徒の育成を目指して」を研究主題として、取り組んでいる。

研究主題から2つの目指す子ども像、2つの仮説、2つの研究の視点を設け、研究主題に迫っていけるよう実践しているところである。

目指す子ども像1. 自らの課題に向かって粘り強く追求する子



仮説1. 自分の体力や運動能力を把握するとともに、そこからわかる自分なりの課題を克服しようと積極的に運動に関わることにより、

自らの課題に向かって粘り強く追求することができる。



視点1. 児童生徒の実態把握  
体力、技能の向上の方策  
運動の特性の明確化  
学習カードなどの利用

目指す子ども像2. 人とのかかわりを通して高まる子



仮説2. 学習を共有する仲間や教師との関わりを重視し、子ども達が自ら主体的に取り組んでいけるような学習活動を工夫することにより、運動に親しむ資質や能力を高めることができる。



視点2. 課題解決的な学習の構築  
学習の多様化  
人とのかかわり

このような内容で研究を行い、子ども達にとって生涯スポーツの礎となればと考えている。

### 授業研究班

#### ○コミュニケーション能力の育成

体育においては、体を動かすこと、身体能力を身につけるとともに、情緒面や知的な発達を促し、集団的活動や身体表現などを通じてコミュニケーション能力を育成することや、道筋を立てて練習や作戦を考え、改善する方法などを互いに話し合う活動を通じて論理的思考力をはぐくむこと。

#### ○知識の活用の重視

知識を活用する学習活動を取り入れることは各運動領域において、知識を活用して運動の取り組み方などを工夫することができるようにする。知識、思考、判断の内容としては、運動の特性やその成り立ち、運動の名称や行い方、関連して高まる体力などを理解し、課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする。

### 調査研究班

#### ・平成15～18年度

市内小学5年、中学2年の新体力テストを4種目ではあるが、4年間継続して調査し考察す

ることができた。(全体数値比較、運動クラブ加入の有無での比較、運動頻度での比較など) 全道、全国の数値と比べると、苫小牧のどの学年 男女もかなり下回っており、4年間ほぼ同様な結果が得られた。その研究調査とは別に体力向上の方策も話し合われてきた。

• 平成19、20年度

苫小牧児童生徒の体力の実態が見えてきたので、それをいかに改善していくかを論議したり、実技研修を行って研修を進めていった。(リトミック、ラダートレーニング、コーディネーショントレーニングなど)

• 平成21年度

今年度、新たに苫小牧市内児童生徒のスポーツ活動等加入状況調査を行い、市内児童生徒の体力向上に役立てていきたいと考えている。

### 3. 成果と課題

日本では今、少子化が進み、さらに昭和60年(1985)頃から体格は良くなっているものの ①体力・運動能力の低下 ②身体を操作する能力の低下 ③生活習慣病の危険性の高まりといった懸念すべき状況が報告されている。これらの直接的な原因として、①学校外の学習活動や室内遊び時間の増加による外遊びやスポーツ活動時間の減少 ②空き地や生活道路といった子ども達の手軽な遊び場の減少 ③少子化や学校外の学習活動などによる仲間の減少をあげている。

私たち指導者は、心身共に著しく発達する児童期に、何を、どのように、支援できるのか。民間クラブ、スポーツ少年団等の活動の場はあるのだろうか、全ての子ども達が参加しているわけではない。スポーツができる子どもや好きな子どもはいいかもしれないが、そうでない子どもたちもおおよそ30%強いる。(苫教研保体部会 2006)

運動をする時間、空間、仲間が減少している現在、運動経験や運動の日常化の果たす役割は、これまで以上に重要になってくると考えられる。特に、学校体育では身体の健全な成長を育むとともに、精神についても同様のテーマを解決できる教科ではないか。体力、運動能力の低下は、一般的に知られているが、気力、意欲の低下を指摘する人も少なくない。たとえば、「話さない、笑わない、すぐ切れる」に象徴されるような、情意面の課題である。

学校活動での運動は、気持ちを解放して夢中になって動き、先生と子ども達が一緒に運動の楽しさ、できる喜びを味わうことである。この体験があるからこそ、運動の日常化につながるのではないか。私たち人間は、楽しいと脳が活性化して意欲も湧いてく

る。もう少しやってみようということにもなる。子どもの時に、体を動かす楽しさや喜びを体験しておくと、将来も気軽に運動に接することにつながると思われる。

今後も調査研究で、子ども達の実態を把握し、授業研究で、子ども達の体力向上と生涯にわたって運動に親しむ態度を育てていきたいと考える。

### 4. 役員・事務局員名簿

#### 歴代会長 (平成10年度以降)

平成10年度～11年度

佐藤 勲 (樽前小校長)

平成12年度～13年度

八木橋 政 則 (和光中教頭、沼ノ端中校長)

平成14年度～16年度

沖田 秀 児 (勇払中、苫小牧東中校長)

平成17年度～18年度

濱口 明 雄 (弥生中校長)

平成19年度

平 沼 秀 之 (啓北中教頭)

平成20年度

五十嵐 卓 二 (凌雲中校長)

#### 事務局 (平成21年度)

会 長 谷 川 充 穂 (澄川小教頭)

副会長 中 村 浩 士 (光洋中教頭)

” 加 藤 悟 (明倫中教頭)

幹事長 五十嵐 寛 明 (大成小教諭)

授業研究班班長

柴 田 知 巳 (美園小教諭)

調査研究班班長

仲 見 真 樹 (澄川小主幹教諭)